

環境の整っていない患者の退院 へのアプローチについて

医療法人社団生和会 周南リハビリテーション病院
地域連携部 高瀬 俊彦

【倫理的配慮】

今回の発表に際して、本人・家族へ電話による内容に関する説明、書面による症例発表への協力と同意を得ています。

57歳男性(椎間板ヘルニア椎弓形成術・5/10OPE後)

障害年金(1か月12万円)での生活。

元妻とは離婚しているが、現在も毎日家へ行っている状態。
三男はスーパーにパート勤務している。家事は三男と分担して行う。

住宅は市営アパートの1階に住み、室内に手摺はなく、段差も多い状態。住宅改修は難しい。

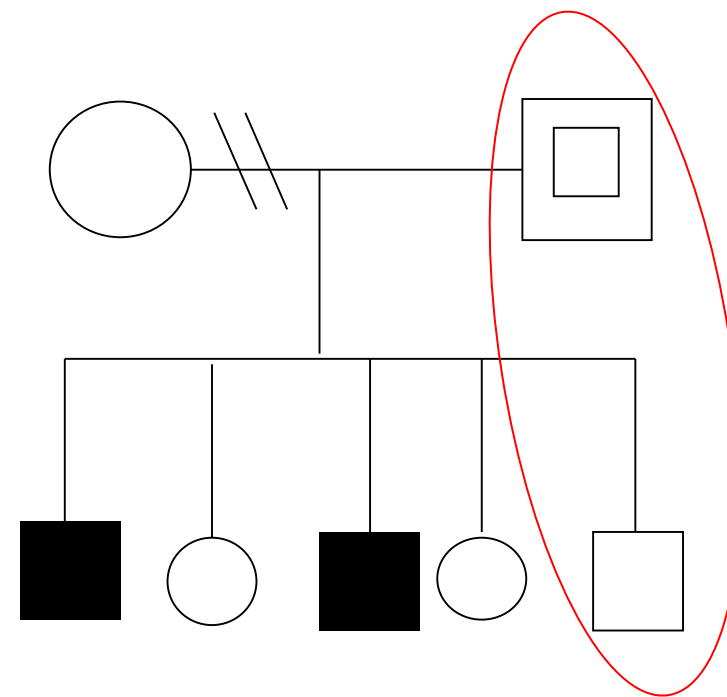
【既往歴】

30歳 統合失調症・精神障害者手帳2級

56歳 バイクから転倒し、頭部外傷・頭蓋内血腫除去術

57歳 バイクから転倒し、右大腿骨骨幹部骨折

59歳 C6/7椎間板ヘルニア



【入院までの経緯】

2018年4月に頸部痛が出現し、C6/7椎間板ヘルニアの診断。

5月10日に椎弓形成術を行う。本人からは自宅への早期退院希望があったが、動作に不安が残る状態。

家族からのリハビリ希望で当院へ入院。

2018年5月22日・当院へ転院

【本人・家族】

◆実際の能力と本人の認識にギャップ

⇒家族は不安だが、あきらめている様子もある。

【ADL面】

◆立位は不安定・トイレ動作は手すりが必要。

◆病棟ではオムツでの対応。車椅子移動の状態。

⇒自身で身の回りのことが出来なければ退院は難しい。

2018年6月中旬

リハビリの結果、前腕支持型歩行車での歩行、病棟のトイレでの動作が見守りで行える状態まで改善。不安定さは残るが身の回りのことは行えている。

⇒ 自宅退院希望である為、家屋調査を実施。トイレ・浴室までに段差が多く、屋内での歩行器なしでの移動に不安は残る状態。

【課題点】

◆リハビリ期限内で体力をつけることが難しいが、家族間で話し合いができず、今後についてまとまっていない。

◆現状で利用できるサービスが少なく、家族の協力がなければ退院は難しい。

【対策】

- ◆疾患別リハビリも検討するが、費用面の問題もあり希望されず。
- ◆市営住宅の中でもバリアフリー仕様のものがいくつかある為、転居の検討。
- ◆精神病院のワーカーと話し合い、利用できるサービスを検討。医療による訪問看護サービスを利用し、退院後状況を見ながらのデイケア利用につなげていきたい。
- ◆歩行器は家族とも相談し、購入することとなる。

2018年7月20日/リハビリ期限にて自宅退院

- ◆屋外は歩行器歩行で可能、屋内は伝い歩きの状態。
- ◆退院までに転居は行えていない。
⇒自宅内動作は何とか行えている状態。
- ◆通院や買い物に関しては家族の見守りの中で対応。
- ◆訪問看護を利用して経過を見ながらデイケアを検討。

【考察・まとめ】

介護保険が非該当となる患者に対して、どのようなサービスが提供できるか。

→他院のワーカーと連携をとる事や、本人と家族の話し合う場を作り、退院後の生活を支援することができた。

→家族の関係性がうまくいっていなかったのかという背景への掘り下げが不足していたことや、利用できるサービスが何かということに捕らえられて考えており、地域の資源に関しても検討出来ていなかった。